

1. 活動が必要とされた状況

長年、環境保全型農業として、有機・無農薬の田んぼ作りを行なっている。農業体験を多く行い、自然環境との調和を目指す田んぼの意義を伝える活動をしてきた。活動を行うにつれ、田んぼ体験の参加者に畦の重要性を伝える難しさに直面している。畦に不用意に立ち入り、損傷、決壊させてしまう人が多くいるのだ。畦の決壊には、見沼の地域的な要因、虫や動物の要因がある。見沼田んぼの土地は軟弱で、先人から毎年畦を作らないといけないと伝えられるほど柔らかい。また、無農薬栽培のため小動物たちが生存でき、畦が弱くなっている。一般的な除草剤処理の水田であれば、畦に横穴をあけるザリガニは死滅する。しかし、無農薬の田んぼでは生存し、畦に巣穴を開けて損傷させていく。また、もぐらは餌のみみずを探し求めて、畦に長い縦穴をあけてしまう。このようにして脆くなった畦に人間が立ち入ると、畦を沈めてしまい決壊することが多々起きる。決壊が起きるとその後の修復には多大な時間と労力を要することになり、未然の行動が必要になってくる。このような状況に陥らないために、耕運機による畦の補強を思いついた。



2. 活動の内容（実施時期、参加人数、活動内容など）

2月22日に畦の補修作業を行った。参加人数はボランティアを含め5人である。今回助成を頂いた耕運機を使い、1反の田んぼ周囲の畦の耕運を行った。これにより畦内部の穴を壊すことができた。

3. 活動の成果

耕運を行い、小動物たちの活動によって開けられた穴を壊すことができた。今回の耕運では想定以上に畦が沈み込んだ。これは小動物たちの活動によって畦が予想以上に空洞化していたと考えられる。今後の活動で、土を上乗せし、畦を踏み固めることによる補修の目処をつけることができた。畦の崩壊の危機を未然に防げたと考えられる。また、体験田んぼにおける畦は、人がすれ違える幅にしなくてはならないため、一般的な田んぼよりも大きな畦を要する。その幅は1mほどになる。当然ながら広くなるほどに雑草管理が大変になってくる。今回の耕運により雑草のすき込みも行えたので、繁忙期である5月の草刈りの頻度を減らすことができ、時間的、体力的な余裕を生むことができると想定される。

4. 今後に残された課題

環境保全型農業で田んぼを維持していくには、未だ参加者の体力に依存してしまっていることが課題として挙げられる。マンパワーが多くある場合は畦づくり、田植え、草取りなど順調に行えるが、人数が少ない場合には作業が進まず田を維持することも難しい。無農薬で田んぼを続けるには人員に左右されないよう更なる機械化を進める必要がある。今回の取り組みで水田における水漏れの脅威度を減らすことができ、初期の畦草刈りの回数を減らすことができた。しかしながら年々気温が上がる梅雨以降の雑草管理は命の危険もあり得る過酷な作業となりつつある。今後、更なる作業の省力化として歩行型の畦草刈機を導入することができれば今後の田んぼ活動の継続にも明るい兆しを見ることができると期待される。